

アノ・チノ・コノ

ベロ一

回心の軌跡

渋谷雄三郎

冬樹社

著者略歴

渋谷雄三郎 (しぶや ゆうざぶろう)

1932年生まれ ニューヨーク大学大学院修了
アメリカ文学専攻 現在、東京学芸大学助教授
著訳書、『サリンジャーの世界』(共著、荒地出版社)
『ヘミングウェイの世界』(共著、荒地出版社)
ヘレン・ワインバーグ『アメリカの
小説』(研究社) その他

ソール・ペロー

昭和53年9月25日 初版第1刷発行

著 者 渋谷雄三郎

発行者 高橋直良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町2-18

郵便番号101 振替 東京8-7757

電話 東京 03(264)0346(代表)

印 刷 稲葉印刷株式会社

製 本 株式会社 美成社

装幀者 三嶋典東

©Yuzaburo Shibuya 1978

0098-10272-5190

本書の内容の一部あるいは全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著作権者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

目次

第一部 作家の生い立ちと背景

一	ロシアのユタヤ人……………	9
二	父と母……………	26
三	モントリオールのスラム街の記憶……………	34
四	シカゴの移民地区……………	40
五	説教者と犯罪者の系譜……………	51
六	アイザック・ローゼンフェルド……………	62
七	左翼政治の時代……………	74
八	ニューヨーク(『パーティザン』)知識人……………	78
九	第二次大戦と知識人……………	87
十	「肥大の時代」……………	94

土	玉石混淆としての実存……………	102
土	「封印された宝」……………	107
三	シカゴへ帰る……………	115

第二部 作品から辿る作家の軌跡

一	抑うつ下の模索……………	123
	——『宙ぶらりんの男』と『犠牲者』	
二	華麗なる燥病……………	144
	——『オーギー・マーチの冒険』	
三	「病める魂」の再生……………	161
	——「現在をつかめ」と『雨王ヘンダスン』	
四	暗き森の中での覚醒……………	186
	——『ハーツォグ』	
五	服喪者のカーディッシュ……………	205
	——「古い道」と『サムラー氏の惑星』	

六 科学的世界観を克服して……………221

——『ハンボルトの遺贈』

あとがき……………237

ペロー略年譜……………240

ペロー主要文献

索引

ソ
ー
ル
・
ペ
ロ
ー

第一部 作家の生い立ちと背景

（アイザック・バーベリとは何者であったか。彼はどこから来たのか。彼は偶然であった。われわれはみなそのような偶然である。われわれが歴史と文化を決めるのではない。われわれはただ現われるだけだ、自らの選択によらずに。われわれは入手可能な手段によってわれわれの条件をできる限り利用する。われわれは、あるがままの玉石混淆を、その不純を、その悲劇を、その希望を受け入れなければならない。

——ソール・ペロー『ユダヤ短篇名作集』序文より

一 ロシアのユダヤ人

ソール・ペローは一九一五年六月十日（役所の記録では七月十日）にカナダのモントリオール郊外のラシーヌという村に生まれた。四人の子供の末っ子である。両親は二年前の一九一三年に帝政ロシアから移住してきた。一八八〇年代から始まったツアー支配下の領土からのユダヤ人の二百万人もの大量海外移住（東欧ユダヤ人の三分の一に及んだという）は、アメリカに、しかも特にニューヨークに集中していたが、ペローの両親がカナダの、しかも大都市ならざる僻村に移ったのは、先に移住していた父の姉を頼って行ったからだという。頼られた姉夫婦にしても家と職を用意して待っていたわけではないだろうから、ペロー一家はやがて「モントリオールの最も貧しく最も古くからの地区の一つ、聖ドミニック街の坂の、総合病院とレイチエル市場の間」の貧民街に移り、ペローは九歳でシカゴに移るまでここで生長した。

自伝的色彩の濃い小説『ハーツォグ』では、この貧民街はナポレオン街という、滑稽にも偉大な名前で現われる。幼児時の記憶の中から、それは貧乏と剝奪、汚醜と屈辱に貫ぬかれ、正統ユ

ダヤ教の窒息的な空氣が瀰漫する、ロシアのユダヤ人町シユダヤートそのままの生活環境として回顧されている。「私は中世のゲットに生まれつきました。子供時代はいわば古代でして、これはすべての正統ユダヤ教徒にあてはまることでした。子供は物心がつく途端に旧約聖書の中に漬けられました。だから四歳でヘブライ語の『創世紀』を暗記することから人生が始まります。別の世界があらうなどとは思いません。もう少し大きくなると翻訳です。私は四つの言語で育ちました。英語、ヘブライ語、イディッシュ語、フランス語。言葉でできた環境でした」とペローは語っている。

この言語への感受性は、彼を作家にした一因だった。「書くことは実は、私がその頃いつもやっていたことの続きにすぎないのです」(「ニナ・A・ステイアズとの対談」)。東欧ユダヤ人の言語生活は、かれら自身の生活の中でも常に二重言語生活であった。宗教・学問の言語としてのヘブライ語、日常語としてのイディッシュ語である。それに商売人や知識人は寄留先のロシア語なりポーランド語なりを使ったから、三重言語生活となる。ペローの幼時期はたまたま英仏二重言語のケベック州であったから、一挙に四つの言語に曝されることになったわけである。

ペローの父アブラハムは、移住前にペテルブルグに住みエジプトから玉ねぎを輸入する商売に加わっていたという。これは、父が当時においては二重の意味で異色なユダヤ人であったことを示している。まずユダヤ人社会内部において異色な人物であったことについては、ロシア・東欧におけるユダヤ人の生活の歴史を、ごく粗略にでも説明することから始めなければならない。しかしその前に、かれらが西欧ユダヤ人とはいかに違っていたかを認識する必要がある。

われわれはユダヤ人というと、『ベニスの商人』のシャイロツクとか『オリバー・ツイスト』のフエイギンといった卑劣な社会寄生的人物か、ナポレオン戦争で巨利を博し、以降ヨーロッパの金融界に君臨したロスチャイルド家や類似の大銀行家か、あるいはスピノザ、ハイネ、マルクス、メンデルスゾーン、フロイトといった学者・文人・芸術家の系譜を思い浮かべるが、それは西欧におけるユダヤ人のイメージの引き写しである。サルトルの『ユダヤ人』で反セム主義の対象にされると言われているのも、医師・弁護士などの専門職のユダヤ人である。実際には貧しい労働者のユダヤ人も多数に存在しているのだが、西欧ではユダヤ人のイメージとして寄生的知的ブルジョワジーとしてのそれだけが定着し、ユダヤ人はブルジョワジーからは競争相手として、労働者階級からは異邦人の搾取者という二重の意味において、反セム主義の潜在的憎悪に囲まれてきた。

潜在的というのは、フランスでユダヤ人に市民権を与えたサボレオン法が制定されて以来、十九世紀を通じて西欧諸国においては、徐々にユダヤ人の差別的身分制度が撤廃されてきたからである。十九世紀末に、ユダヤ人解放の先進国フランスで、ドレフェス事件が起ったことは、西欧における反セム主義の陰湿さを物語っている。とはいえ、十九世紀以来西欧のユダヤ人は着実に寄留国への同化とブルジョワジーの道を歩んでいたのである。その成功がむしろわだつたいたために、ナチスの反セム主義が功を奏したと見る観点さえある。たしかに労働者・職人の比率が小さく、小規模の小売商人もいたけれども、西欧のユダヤ人は主としてそのイメージ通りにブルジョワジーに属していた。

これと対照をなすのがツァー支配下のユダヤ人であった。まず、法制的には「第二または第三種市民」という階層に属していた。一七九四年の法令により内ロシアに定住することを許されず、かれらの居住地はバルト海から黒海に至るいわゆる「居留の柵」に限定された。現在のポーランド、ソ連邦内のリトワニア、白ロシア、ウクライナ共和国を含む地域で、一八九七年には、ロシアの全ユダヤ人口の九四パーセント、四百九十九万人弱が住んでいて、その地域の人口のおよそ十二パーセントを占めていた。ユダヤ人は十一世紀までにロシアにかなりの規模の共同体をもっていたが、十二世紀初めまでに、キリスト教に改宗したロシア人によって最初の襲撃を経験している。それ以来ロシアのユダヤ人は快適と言いうる生活を送ったことがなかった。ポーランドへ逃げたユダヤ人も、そこがローマ教会の影響下にあるのを見出した。十字軍に付随するユダヤ人迫害が軽減することがなかった。十八世紀末ポーランドがツァーの支配下に入ってから、歴代専制君主たちの気紛れな圧迫と弛緩のサイクルの下でユダヤ人は一喜一憂をくり返していた。圧制の中でもとりわけ遺伝子のように世代から世代へと語り伝え継がれたのが、ニコラス一世の治世（一八二五——一八五五）であった。

ユダヤ人圧迫のため六百以上の勅令が發布され、住みついている村落からの追放、イディッシュ語・ヘブライ語の本の検閲、ユダヤ人学校のカリキュラムへの干渉など、宗教的社会的団体としてのユダヤ人共同体の破壊を狙ったものだったが、特に激烈を極めたのは徴兵制の施行であった。十二歳から十八歳までの少年が最長二十五年もの兵役に服さねばならなかった。ユダヤ人だけの同質的社会から非ユダヤ人の異質の世界に投げこまれた恐怖と惑乱、過酷な訓練に加えて、豚肉

などのタブー食品を恐れるあまり、ただでさえ貧弱な給食を控えることから生じる栄養失調、それによっていっそう加速される、ユダヤ人に多かった結核などで、多くはハエのようにばたばたと死んで行った。ナチスの科学的二十世紀的ユダヤ人問題解決策の十九世紀ツァー版であった。金持のユダヤ人は買収や身代りによって息子を兵役から免れさせることができたが、貧乏人は、片目をつぶすとか腕を折るとかちんばになるとか以外に逃げ道がなかった。ある村にそのような身体毀損の専門家がいて、徴兵官が訪れたとき、村の若者全部が身体障害の兵役不適者だったという話が伝わっている。

ロシアのユダヤ人が西欧ユダヤ人と違っていた第二の点は、例外的に富裕階級や商人や小売商はいたが、大多数はその日暮しの労働者や職人の貧民であったということである。その下には行商人や屑屋や乞食や結婚媒介人や墓掘りがいた。この人たちも含め、そのほかどうして食べているのか見当もつかないルフトメンシュ（空気の人、の意味）と呼ばれる人々がいた。いつかは鰻腹食べられる身分になりたいものといつも夢見ているが、差当って飢えをしのぐために色々と手を出すものの、ことごとく失敗するという民俗的ジョークの人物、シュレミール（ヘマ常習者）や、シュリモズル（ツイていない人）やネベック（貧乏くじ引き）を生み出したのは、これら実在したルフトメンシュである。

シュレミールがやつとありついた熱いスープをこぼす。それを首筋にかけられるのがシュリモズルで、ネベックは拭き取ってやる破目になる。シュレミールがバターを塗ったパンを落とすと、必ず塗った面が下になるという。彼はバターを両面に塗る男である。シュリモズルがランプを売

り始めれば、太陽は沈まないだろうと言われている。一人のネベックより十人の敵のほうがありがたい、という諺がある。こうした人物を軸にした種類のジョークは、ユダヤ人コメディアンによって今世紀早くからアメリカの娯楽界にもちこまれたが、五〇年代にはバーナード・マラマツドとI・B・シンガーによって、ユダヤ系文学の特色の一つとして定着した。ユダヤ的ユーモアが、エスプリとかウィットというような高尚な香りに欠け、滑稽と切なさと同じ憐愍の卑俗な混淆物であるのも、東欧ユダヤ人の恒常的貧窮と絶望感に発しているからである。

法制的差別と貧民の大集団という特徴に加えて、ロシアのユダヤ人が西欧ユダヤ人と異なった最大の決定的な点は、正統ユダヤ教の遵守であった。かれらの生活は、寸度の世俗性の包領も許さない、宗教的規律が完璧に隔々にまで支配した生活であった。それは、そもそもがモーゼの十戒に端的に示されるように、ユダヤ教が、キリスト教やグノーシス派におけるような理念的観念的な飛翔への傾向を戒め、飽くまでも地上的倫理的な基盤の上で神意の実現に努力するという特質によるものである。神の言葉、旧約聖書の最高の理解者・解釈者としてのラビは、共同体の指導者であり裁きの庭の調停者であり、身の上相談のカウンセラーでもあった。ユダヤ教は神とユダヤ民族との契約に基づくもので、プロテスタントが考えるように、神と個人との直接的な結びつきは初めから前提とされていない。神への祈りは、少くとも十人の会衆が集まってはじめて効力をもつと考えられていた。このため会堂や学びの家といった、本来が宗教的な場所が共同体の集会所となり、活動の拠点となった。ユダヤ人の家庭生活は、毎週金曜日の日没から土曜日の日没までの安息日によって週のリズムを与えられる。新年の十日間（悔悛の十日間）は、神を讃え